

この公演では、富山オーバードホールの2000をゆうに超える従来の客席は使わない。案内のまま通常のステージへ上がり、上手から裏側へまわった先に特設シアターがしつらえられている。椅子も幕も、真っ黒。座席にはひとつずつ、片耳のみのイヤホンが置かれていた。わずか216席の空間にイヤホンを手にした客がひしめき合って座る中、舞台は始まった。

さびれた商店街にある食堂にふらりと現れた若者。旅先で何か美味しいものを食べようと店に入ったのははずだったのに、やがてマスターから店を任せるといふ提案が持ち上がる。

店はもちろん架空だが、そこかしこが富山そのものだ。路面電車が街を走る音も、信号の青の音も。とりわけ印象的だったのは、マスターや常連客達が話す富山弁の柔らかさだ。調理の仕方がまるでわからず、厨房でもたもたする若者へのツッコミも、優しさを感じる。なりゆきとはいえ、自分探しの途上にいる若者には居心地のいい響きを感じたかもしれない。徐々に、店と土地をとりまく戦いへと巻き込まれていってしまうのだが。

随分店の仕事にも慣れてきた若者にマスターが勧めた酒は、1939年もののスコッチウイスキー、マッカランである。飲めないと狼狽えながらも口をつけたあたりから、マスターと若者は混ざっていく。同じように片耳にイヤホンをつけたわたしたちも若者と同化していく。明るそうにも見えたストーリーは闇の方へと徐々に傾いていく。

……市場へ向かう荷馬車のうえに

悲しいひとみの子牛が一頭…… ※1

劇中何度となく流れるジョン・バエズの歌う「ドナドナ」は、この劇の持つ世界観に馴染む。この曲が生まれたのがマスターのマッカランの製造年とほぼ重なるのは、偶然だろうか。

ラストは恐ろしい、きりなし話のようにもとれる。けれども観終わった後に一番引きずったのは、恐怖ではなく食欲だった。仕方がない。ドレス・ド・オムライスにホワイトソースをかけた名物立山ライスや、時に炎を上げつつ絶妙な加減で焼かれたステーキなど、定食屋のメニューは舞台上で本当に作られ、その度にいい香りを嗅がされていたのだから。観劇後、ついオムライスに走ってしまった客は、わたしだけではないだろう。

タニノクロウをはじめ、キャスト全員、美術スタッフまでも富山ゆかりの人である。生まれ育ち、暮らす場所への愛着、そして芝居作りという挑戦への熱意を充分に感じた。

やや残念だったのは、わたしを含め客の年齢層が高めだったこと。もし次があるのなら、もっと若い、10～20代くらいの人たちにぜひ観てほしい。

*1 日本語訳は細身和之（『ポップミュージックで社会科』みすず書房 2005 より）